
この言葉以外見つからない

春桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この言葉以外見つからない

【Nコード】

N3454M

【作者名】

春桜

【あらすじ】

ウルキオラは消えてしまった。その時織姫の心は・・・。

（前書き）

字間違いは勘弁。ウルキオラが消えた後の話です。

行かないで。独りにしないで。どんなに叫んでも叶わないことは知っている。

それでも私は手を伸ばした。

「井上．．．。」

「いっちゃった．．．。どうしてかな？涙が止まらないよ．．．。」

彼はいつてしまった。二度ともう戻らない。そんなことを頭に浮かべると涙が止まらなかった。

彼は最後に小さく笑った。消える。消えてしまう。

失ってはじめてわかった。

いつの間にか、彼は私の支えになっていたんだ。

そうだよね．．．．？

「黒崎．．君がウルキオラを倒したのは違いないかもしれない。けど井上さんを守ったのは彼だ。」

石田君の言葉が胸につきささった。

「違う．．．。黒崎君は何も悪くない。ウルキオラさんは敵だった。だから．．私を助けようとしてくれただけ。悪くないよ．．．。」

ありがとう。二人とも。」

「井上さん……。」

大丈夫だよ。私は大切なものを彼に貰ったんだから。

だから……寂しくないよ。悲しくないよ。

「女、何をしている？」

「えっ！？あのウルキオラさん……。」

「泣いていたのか。」

ウルキオラさんはため息をつき、私の横に座る。

私は無言でうつむいた。

「貴様は、何のためにここにきた？」

「そ、それは……。」

「仲間を守るためだろうか？無力なお前ができることは犠牲になることだ。」

「そんな……。」

「ひどいことを言っているか？貴様は何もできはしない。だが俺たちは貴様を必要としている。斬り捨てた仲間を思うより今を見たほうが懸命だと俺は思うがな。」

そうかもしれないけど、仲間を忘れることはできない……。

「私は……。」

「貴様は何のために生きている？俺達に必要とされることが生きる意味だろうか？それでは十分ではないのか？人間とは欲の塊だな。」

彼は同じようなセリフをはく。どうしてだろう……。ものすごく。

彼の鼓動が聞こえる・・・。

「どうした？」

「えっ！？あの・・・。」

「？」

「あなたは私を必要としてくれますか？」

彼は少しためらって口を開いた。

「藍染様が必要とするならば俺は必要としているのだろうな。誰かに必要とされれることはきつと意味があるのだろうな・・・。」

彼は悲しいような顔をしている。まるで自分が必要じゃないみたい
に・・・。

「私は・・・私は！ウルキオラさんのことを大事に思ってますよ！
藍染様より必要とします！だから・・・

そんな顔しないで下さい。」

彼の顔を見ると胸が痛むから、悲しい顔はしないで。

「必要にするか・・・。」

彼は立ち上がって行こうとする。

「待つて!!！」

「・・・。。。」

私は無意識に彼のすそを掴んでいた。

「離せ。」

「あつ、ごめんなさい。」

「何故だろうな・・・。」

「えっ!？」

「この何も無い肉体が熱い・・・。貴様、俺になにかしたのか？」

「な、なにもしてません・・・よ。」

「また来る。俺はそう簡単に消えはしない。」

また泣きそうな私を彼は彼らしい言葉で安心させてくれる。私は自然と笑顔になる。

「何故笑う？」

「嬉しいからです。ありがとう。ウルキオラさん！」

「．．．．．可笑しな奴だ。」

今度こそ背を向けていつてしまった。

どうしてだろう？彼と一緒にいると全てが忘れられる。

笑顔になれる。

だから最後にも伝えたかったのに。

どうして私はいつもうまくできないの？

「許して。ウルキオラさん。」

私はウエコムンドの空を見上げた。

「最後までこの気持ちが言えなかった。．．．好きです。」

「そして．．．。」

「ありがとう．．．。」

彼にこの言葉が届いているだろうか？

届いているなら、返事をしてください。

どうか、どうか、笑っていてください。

私はあなたから笑顔をもらったのだから。

（後書き）

グダグダ．．．いつもながら流れで書いてると混乱してきます。読んでいただければ幸いです。

読

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3454m/>

この言葉以外見つからない

2010年10月9日14時36分発行